

産婦人科・不妊クリニックへの電子カルテ導入と今後の展望

The Introduction of the Electronic Medical Record at Private Reproduction Clinic and the Future

桜井 明弘 SAKURAI, Akihiro

産婦人科クリニック さくら Clinic SACRA

本年4月に横浜市青葉区新石川、東急田園都市線たまプラーザ駅南口に産婦人科・不妊クリニックを開設した。当院は産婦人科の一般的な診療と体外受精などを含む高度生殖医療までを含めた生殖医療（不妊診療）を2つの柱としている。

当院開業に当たり、電子カルテ導入に至るプロセスを提示し、エンドユーザーとして、導入後の現況と問題点、展望を概説したい。

電子カルテはクリニック運営の基本的な戦略の一つに位置づけていた。電子化により、診療効率を上げ、ひいては患者サービスの向上に反映させることを考えた。

当初漠然と考えていた効率化とは「診療録入力」と「診療情報管理」の効率化である。日常診療で紙カルテに記録していると、PCでいうコピー＆ペースト機能が欲しくなることがある。一人ひとりの患者の症状や所見、検査データなどが異なるのは当然であるが、各患者に共通する最大公約数的な事項が必ずある。例えば、婦人科では下腹痛や帯下以上を主訴とする場合である。腹痛を疑う場合に、妊娠に伴うものや腫瘍性疾患、炎症性疾患、と考えていくと、ほとんどの患者に共通した問診、検査がある。最たるものは「検診」である。産婦人科では「子宮がん検診」「妊婦検診」がこれにあたる。検診は原則的に無症状だったり疾患を抱えていない「健常人」であることが多いため、診察内容にバリエーションが少ない。コピー＆ペーストが最も活かしやすい領域である。当院で行う生殖医療も、対象臓器が子宮内膜や卵巣に限られ、測定するホルモン検査も数は多くなく、また診療が行われるのも、月経

期、排卵期、黄体期、とほぼ決まっている。これらもまた診療のパターンが決まっている。

「診療情報管理」の効率化には、紹介状や証明書の作成、検査・画像データの管理である。手書きでは紹介状に患者氏名・住所など一枚ずつ書き込まなければならないが、これらの基本的な情報はあらかじめ入力されており、プログラムされていれば、コピー＆ペーストの手間さえ省ける。検査データや画像データも時系列で並べることが出来、疾患の推移や治療効果の判定に有用である。

私が従来PCに対して抱いているイメージは「文房具」、特にこれをツールとして用いる以上、アナログの文房具以上の利便性と発展性を求めている。これらを踏まえた上で電子カルテの各業者からのデモ、プレゼンテーションを受け、私なりの感想を以下にまとめる。

電子カルテ導入のメリットは、大きく4つに大別される。即ち、「医療効率・診療効率の向上」「省スペース化」「人件費節約」「拡張性への期待」である。

「医療効率・診療効率の向上」には、診療録入力、診療情報管理、医事会計業務・診療報酬請求の効率

化が挙げられる。具体的にはカルテの出し入れの必要が無く、医療事務職の負担軽減と人的資源の効率化が最も大きい。

反対にデメリットとして、導入への根強い旧勢力の抵抗、キーボード診療と呼ばれる、入力作業に没頭し非人間的な診療になる可能性、PC ハードやソフト、更には停電時のトラブル、インターネットの弊害として、コンピューターウィルスや診療記録の流失の可能性がある。またソフト間の共通言語が普及しておらず、情報の共有が困難である。さらに紙カルテには、捨てがたいアナログ情報の魅力がある。

実際に導入に当たって、何を優先すべきか、であるが、私は自分の診療サポートとして、使い勝手や入力メソッドを第一にせず、「画像管理」と「時系列カルテ」の作成を重く考えた。後者は母子手帳を思い浮かべていただくと理解しやすいかも知れないが、毎回の診察で同じようにとるデータを並べる、グラフ化ではなく、表にしたものを生殖医療に導入したかった。

次の優先事項は価格であり、OS である。更にサポート体制やオプションの希望に対応してくれるのを考えると、大手かベンチャーか、と言った選択に迫られた。

このような様々な因子があるため、一概に甲乙付け難かったが、キワム電腦工務店の高橋究医師開発、サン・ジャパン社販売の WineStyle に決定した。

MacOS のため、デザインに優れた Apple 社製の PC をデスクに飾れる、と言った精神的充足感は勿論であるが、同社のサポート体制、いくつかの便利な機能を決め手にした。

勿論、全てに満足しているわけではなく不満足な点もあるが、エンドユーザーの希望も取り入れてバージョンアップを考える姿勢には期待を抱く。

今後の電子カルテのあり方、展望を、自分の要望を込めて列挙すると、より細やかなカスタマイズを支援するサポート体制をまず挙げたい。電カル・レセコンは診療の基軸になるものの、実地医療の現場では医師は多忙であり、開業前は更に多忙を極める。このよう

な中でのサポートは電カル導入の成功の鍵である。また上述したように、他院とのやりとりやどの医療機関の電カルでもすぐに使えるように、「共通機能」を持ち、「共通言語」で走る電カルの開発・統一が、電カル共有化の実現をもたらす。そして最後により安価なソフトの実現である。導入時コストの低減化は、やはりエンドユーザーの切なる願いである。

電子カルテの開発は、これでもまだ始まったばかりかも知れない。医療現場のIT化を更に進めるために、開発が続けられている次世代の電カルには、更なる期待を抱きつつ誕生を迎えたい。